

炎症性腸疾患に対する新薬の特集



第3弾 シンポニー®

今回はシンポニー®について紹介します。日本では既に関節リウマチに対して使用されていますが、2017年3月より中等症から重症の潰瘍性大腸炎に対しても使用可能となりました。

シンポニー®はレミケード®やヒュミラ®と同じ抗TNF α 抗体製剤の注射薬です。TNF α は身体を細菌や異物から守る働きをしていますが、潰瘍性大腸炎ではTNF α が過剰に産生されることで腸の炎症が続き、粘膜が傷つき下痢や腹痛などの症状があらわれてきます。シンポニー®は、このTNF α の働きを抑えることで潰瘍性大腸炎の炎症を抑え、症状を軽減・改善します。

シンポニー®の投与経路は皮下注射です。初回投与した後2週間後に2回目の投与を行い、以降は4週間に1回投与を行います。自己注射が可能なヒュミラ®と異なり、病院で医療従事者が投与を行う必要がありますが、点滴投与のレミケード®と比較して投与時間が短いという特長があります。

皮下注射と聞いて痛そうと思う方がいるかもしれませんが、シンポニー®の臨床試験で注射部位疼痛が認められたのは、212例中1例(0.5%)のみでした。当院でも数名の患者さんに投与していますが注射部位疼痛が問題となるケースは殆どありません。シンポニー®は100%ヒト抗体蛋白からつくられた完全ヒト型TNF α 抗体ですので、レミケード®で問題となるアレルギー症状も起きにくい製剤と考えられます。

しかし、免疫反応を抑えるため、結核やB型肝炎の既往があると再燃の可能性があり、過去に感染していないか確認が必要です。副作用としては、発現頻度は稀ですが、神経の病気である脱髄疾患、間質性肺炎などがあります。脱髄疾患の既往や家族歴がある場合は投与開始前に主治医に伝えてください。投与開始後に間質性肺炎の初期症状である発熱、咳、息苦しいなどの症状が万が一みられた場合は受診し、主治医に相談してください。

日本で使用できる3種の抗TNF α 抗体製剤の使い分けは、まだ明確なものになってはいませんが、今までレミケード®やヒュミラ®といった抗TNF α 抗体製剤を使用していて、途中で効かなくなってきた場合にも効果が認められることもあり、シンポニー®は重要な選択肢のひとつとして期待されています。

次回はクローン病の新薬ステラーラ®について紹介させていただきます。

(文責: 薬剤師 中村俊貴)